

応化会だより

昭和 53 年 9 月 第 24 号

早稲田応用化学会

昭和53年度早稲田応用化学会総会

日時：昭和53年5月11日(木)午後5時～8時半

場所：大隈会館

1. 講演：午後5時～6時（於大隈会館1階1～2号室）

演題：世界から見た化学界

講師：大饗茂氏（24回，昭和18年卒）筑波大教授

2. 総会：午後6時～6時半（於同上）

(1) 会長挨拶

(2) 昭和52年度事業報告および収支決算

(3) 役員に関する件

(4) 昭和53年度事業計画および予算

(5) その他

3. 懇親会：午後6時半～8時半（於大隈会館3階1～2号室）

お詫び

印刷終了后下記のミスプリントを発見しました。申訳
けございません。御訂正下さるようお願い致します。御
迷惑をお掛けした方々に深くお詫び申し上げます。

頁	行目	誤	正
9	↓ 1 3	村 井 資 次	村 井 資 長
1 6	↓ 1 4	片野沢 敏 郎	宇野沢 敏 郎
2 9	↑ 1 4	水 科 光 安	水 科 元 安
2 9	↑ 1 3	出 倉 幸 一	宍 倉 幸 一
3 1	↑ 5	鈴 木 春 男	鈴 木 晴 男
3 4	↑ 3	名 手 孝 三	名 手 孝 之

目 次

1. 昭和53年度早稲田応用化学会総会挨拶 4
2. 職場紹介 日本石油グループ 14
3. 母校だより 19
 - 3-1. 新任教員挨拶 19
 - 3-2. 学 生 部 会 20
 - 3-3. 化 学 系 新 棟 24
 - 3-4. 教室人事・消息 25
4. 支部・クラス会だより 26
5. 昭和52年度庶務・編集・会計報告 27
6. 昭和53, 54年度役員事務局および評議員 31
7. 会費値上げについてのお願い 33

1 応用化学会総会

大友会長あいさつ

大友 恒 夫

秩父セメント(株)会長

早稲田応化会 会長



ただいまご紹介をいただきました大友でございます。

このたび、はからずも鎮目会長の後をお引き受けするということになりまして、大変名誉に存するのでございますが、同時に責任がきわめて重大であることを痛感いたしておるわけでございます。かたがたこの応用化学会は、これから申し上げますけれども、いろんな問題を抱えておりまして、今後、運営がなかなかむずかしい段階に来ておると思います。この機会に会員の皆様方の心からなるご協力、ご支援をいただき

まして、大過なく職務を遂行できますれば、はなはだ幸いかと思うのであります。最初に皆様方のご支援をお願いする次第でございます。

副会長、監事、それから会計、庶務、編集の各幹事の皆様方につきましては、この総会前に行われました運営委員会におきまして決定いたしましたので私より発表いたします。副会長には教室側より篠原教授、学外よりは古閑関三君(旧26回)、高橋章君(工経9回)の3名、監事として旧17回の伊藤孝さん、会計幹事は引つゞき鈴木晴男教授に、庶務幹事として今回新たに土田英俊教授と百目鬼さん、編集幹事としては酒井清孝助教授と名手孝之さんそれに引つゞき岸本孝夫さんをお願いすることを決定いたしましたのでどうか宜しく願いをいたします。今回の幹事には従来教室側だけでお引受け頂いたものを学外から庶務、編集にそれぞれ1名参加して頂いたことが特徴で必ずやこの効果があらわれるものと期待をいたしておる次第でございます。

せっかく立ちましたので、この機会に現状の分析やら、あるいはまた今後の会の運営の方針等につきまして、総会の御承認をいただくようなこともございますので、一言申し上げましてご協力をいただきたいと思いますと思うわけでございます。

ご承知の方も多いと思いますが、すでにこの早稲田応用化学会も会員数総計が4,181名、こういう大きな人数になっております。これを大ざっぱに分けて、旧制の方、これは26年卒まででございますが、この方が891名。それから新制になりまして40

年まで勘定いたしますという、これが1,128名。それから41年から本年53年までの卒業生会員は1,565名。これに学生会員の597名を加えて4,181名ということになるのでございます。

したがって、学生はまだ在籍でございますから、ちょうど昭和25年ぐらいが、年数では半ばに達するわけでありまして。人数で申しますという、ちょうど昭和40年が全体の人数の半ばに達するのであります。これが現状でございます。

先ほど来、役員会で会費の話など出ておりましたが、結局、若い方が会費の納め方が悪いということに自然なりますので、したがって、非常に大ぜいの若い会員諸君の分を、少ない古い会員の方が負担するという形にならざるを得ない。したがって、会の運営が大変苦しいということが、この数字だけでも言えるのではないかと思います。

かような会の実情を頭において頂きまして、現在のこの応用化学会の運営上の問題点について、二、三述べたいと思います。

まず第1に、会員がふえたことにもかわからず、組織がそれに伴っていないがために、いろいろな運営上の不便が生じております。会員の各クラスから評議員が出ていただいておりますが、これは会則上「各クラス2名以内」ということになっておりますが、第1に、聞いてみますと、最近の10年ぐらいは、まだ評議員が決まっておらないクラスがございますので、さしあたって、若い方から評議員を出していただく。これもクラスの幹事、クラスの中の互選によってできれば出していただく、こういうことをやりたいのであります。

それから、最近のクラスでは、150人にも上るクラスもございますので、2名というのはちょっと少ないと思います。会則で2名になっておりますが、これは3名以内ということにお改めをいただきたいと思うわけでございます。

なお、この評議員は先ほどちょっとお話がございましたが、会長委嘱ということになっておりますので、名簿が出ておりますが、これは大変不備でございますので、これから各クラスの側とよくご連絡をとりながら、評議員の人、あるいは人数等を決めてご委嘱を申し上げたいと考えております。ここに名簿を差し上げてございますけれど、これは案でございますので、さようご承知おきを願いたいと思います。

なお、この評議員の中から、また運営委員を選びまして委嘱し、運営委員会によってこの会の運営を図ることでございます。めんどいたしまして、大体来月中ぐらいには第1回の運営委員会を開きたいと考えておるわけでございます。

それから、先ほど来お話がございましたように、事務は現在、アルバイトの方に頼っておるわけでございますが、できれば、なるべく早く専任の事務員を置きたい、こういう方向ではないかと思うのであります。さしあたって本年度は予算もありませんので、後ほど予算のご審議をお願いいたしますが、若干いままでより多く予算をいただきまして、事務能力を多少なりともふやしていく、こういうことでないと、いろいろ不都合が

生じてくる。事務がはつきりいたしませんと、名簿もはつきりせんし、会員諸君との連絡も不十分でございます。すべて会の運営に支障を来すことばかりでございます。将来はひとつ十分な予算を持って、専任の事務員を置きたいと考えておるわけでございます。

それから、これはいままででないことでございますが、各先生方のもとにいろいろ研究会、あるいは懇親を目的とした会があるようでございます。実は、ここでもって申し上げてもいいと思いますが、たとえば大坪先生、加藤先生の会、あるいは篠原先生の高研会、それから、実は私も昨年の秋、村井先生の会、これは草炭会というのでありますが、その会長をお引き受けしたわけでございます。それが、それぞれ100名、200名という集団を持っておるわけでございまして、それらの方が、この大きな応用化学会の一つのフラクションとして機能していただくことをお願いしたい。

たとえば、いまのそれぞれの会で名簿をおつくりになるということをやっておられるようでありますが、これは当然、応用化学会の名簿と共同作業でいいんじゃないか。苦勞が省けるわけでございます。それから、会費の徴収でございますとか、というふうなことにお手伝いをいただくということも、やりようによっては可能ではないか。ひとつこの連係動作をお願いをしたいと思うわけでございます。

以上、申し上げたのは組織の強化の問題であります。

次に、何か事をやろうとすれば、先づお金の問題が出てくるわけでございます。特にただいまのこの応用化学会のように、これから会を大いに発展させようというときには、最初に先づ種銭が必要でございます。そうすれば、だんだんと収入も上って来てバランスがとれる状態になってくるわけでございます。先ほど役員会で決めていただいたのでございますが、本年から会費の値上げをお願いしたい。いままで1,500円であったのでありますが、53年度からいろいろ予算の増大が考えられますので、ひとつ曲げて2,500円をお願いをしたいので、これもご賛同をいただきたいと思えます。

なお、これは私案でございますが、実はいままでいろいろご寄付がございまして、貸借対照表上で見ますというと、それが189万円ほどあるわけでございます。これは本会から何も申し上げないのにいただいたご寄付でございまして、これは大事に持って、その果実を予算に繰り入れて使わせていただいております、こういうお金でございます。ところが、ご承知のように189万円の果実では、今日、利息が安い時代で、ほとんど役に立っておらないのが実情でございますので、私といたしましては、この際、この基金を「早稲田応用化学会運営基金」とでもいう名前をはつきりさせまして、受け入れの体制をつくりまして、皆様方から応分のご寄付をいただきたい。数万円ないし数十万円程度のことであろうかと思うのであります。これは毎年の予算にはすぐには繰り入れないで、別途会計にいたしまして、これの果実をもって年度予算の補助をするのが原則でございます。

ご承知のように、この会はときどき不時の費用が発生をいたします。たとえば4年に

一遍名簿をつくる。こういうことで300万円ぐらい金がかかるわけでございます。それから、5年に一遍— ちょうど昨年、応用化学科の60周年というのがございました。あと5年たちますという、今度は応用化学会の60周年というのが来るわけでございます。それぞれ記念行事ということで、功労者に記念品を差し上げたり、祝賀の会合を催したり、こういうことで金がかかるのでございます。そういう不時の費用に対しましては、運営委員会で臨機に、その基金の中から使わせていただいて、それから、またお金を集めてためておく、こういう基金をつくりたいと思います。ご賛成をいただければ、細かい点につきましては運営委員会で案をつくりまして、皆様方をお願いをする、こういう段取りにいたしたいと思います。どうぞよろしくをお願いいたします。

以上、なかなか問題が多くてむずかしいのでございますが、本会はやはり会員相互の親睦なり、あるいは相互啓発なりということが基本にあるべきでありまして、「応化だより」をまず第1の事業といたしまして— 昨年は2度しか出せなかったのでございます。これは予算的な理由でございますが、本年は私が無理を申しまして、3回出させていただくということをお願いをして、そういう予算を組んでもらったので、できれば今後、年4回ぐらいまでは出して、連絡を密にするということをお願いをしたいし、中身につきましてもいろいろ若い方にもご執筆を願うし、あるいは各クラス便り、あるいはさっき申しました研究室別の便り等を載せて、内容豊富なものにしていただきたい、かように存じておるわけでございます。

それともう一つは、昨年もございましたように、やはり講演会の実施でございます。講演会、見学会等によって若い会員層に対する懇親と勉強の機会を与え、そして応用化学会とのつながりを密にする、こういうことがわれわれとしてやるべきことであろうと思っております。

同時に学生部会への援助等ございますが、これもひとつもっと強化をいたしまして、学生諸君が応用化学会に対して将来ともに頼りにするという空気づくりを行い、連絡を密にするような方策を講じていきたい、かように思うわけであります。

要するに、こういうことは会員諸君がすべて、いろんな事業にご協力いただくと同時に、会費を納めていただきまして、物心両面でご援助をいただく、こういうことによつて、この会が成り立つものでございますので、どうぞその点、先ほど一番初めに申し上げましたように、会に対するご援助、特に先輩諸兄の物心両面のご援助を心からお願いいたしまして、簡単でございますが、議事ともつかず、ごあいさつともつかず、私の所感を申し述べました次第でございます。

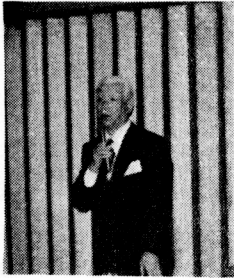
ご静聴ありがとうございました。（拍手）

鎮 目 前 会 長 あ い さ つ

鎮 目 達 雄

大阪有機化学工業協社長

前 早 稲 田 応 化 会 会 長



高い席からごあいさつを申し上げます。

実は私は会長じゃなくて、元会長になりますんです。大友さんがちょっと健康を害しておりますのを無理にお願いしまして、新会長就任はいろいろとおくれたのでございますが、まだやっぱり十分体が回復しておりませんのです。それで、先ほどお帰りになりました。あいさつは新会長がしなきゃならないんでございますが、私、最後のお務めとして、元会長として一言ごあいさつ申し上げます。

本日、雨天で非常に足元の悪いところを、たくさんのお方々がお出ましくございました、ありがとうございました。

また、総長さんが中国へ行く予定が外れまして、きょう非常にご多忙のところをお見えてございまして、錦上花を添えていただきまして、ありがたく思っております。

ただいまはまた、大饗さんの一研究者というか、一学者から見た世界観、大変示唆のあるおもしろい話が多くて、1時間が非常に短く過ぎる思いですぐに終わってしまいました。

いま化学は公害とつながるということで、化学離れということを先ほども言っておりました。私どもは一番小さい会社ですけれども、日本化学工業会というのは、大きな会社を全部網羅しておりますが、そこで、ことし約5,000万円の予算をかけて、東京と大阪のデパートでもって「みんなにわかる化学展」というのを、いまもくろんでおります。で、化学は何も必ずしも公害につながるものではない。化学がなかったら、われわれの生活は何にも成り立たない、というようなことを一般の人たちに認識してもらいわけです。

先ほど大饗さんも言っておりましたが、化学が5%か10%の伸びで21世紀までいく。これは本当のことで、アメリカのマグロウヒルという世界景気を予測する会社の2年前、1975年の予測では、10年後、1985年には、各産業の一番伸び率の高いのは、やっぱり化学で227%、その次がプラスチックの190%で、その次が電気、機械の170%。これは予測ですから、当たるかどうか知りませんが、化学というものはやっぱりどんどん伸びていく、というのが専門の機関の調査の結果です。

ただいまのところは景気が非常に沈滞して、ことに石油の関係で石油化学が沈滞しております。私どももそれに関してやっております、非常に苦しんでおりますけれども、もっとグローバルに考えたら、化学はやはり今後50年、あるいは長くて100年の間には、一番伸びていかなければならない宿命にあるものがございますから、皆さんも、学校といたしましても、大きな希望を持って新しいテーマに取り組んでいただきたいと思っております。

もう時間も過ぎておりますから、大友さんのかわりでございまして、棚橋さんが急なお事故でもって引かれまして、リリースピッチャーとして登板いたしまして数年、無事にやってこれましたことも、教室の皆さん、あるいは会員の皆さんのおかげさまとして本当に感謝もし御礼申し上げます。

非常に簡単でございますが、ごあいさついたします。（拍手）

村井 総長 あいさつ

村 井 資 次

早稲田大学総長



私は、きょうは応用化学会の会員の一人として参りましたので、総長の資格は抜きにさせていただきたいわけなんです。

きょう、私は総会に出ませんでしたけれども、鎮目会長がかわられて、新しく大友さんが会長になられて、それぞれまた新しく役員になられて、応用化学会がますます発展していくことを、ご同慶の至りと心から申し上げるわけでございます。

先ほど大饗さんの話にもございましたけど、私はいま応用化学の教室に対しては、大変申しわけない、全然研究室におりませんので、大きなプレーキのような形になっておりますが、特に教室の先生方、そしてまた先輩の方々、あるいはまた学生の方々にも大変ご迷惑をかけて、お断りを申し上げなければならないわけでございます。

たまたま、いま科学技術会議というものがございます、これは何か国会審議でやかましいんだそうですが、何ということか、東大の向坊君が「たまた私学から出る」ということで、昨年从那らに出ております。

そこでいまやっておりますのは、日本の科学技術行政のまとめ役をやるし、また、日本の科学技術のあり方についての建議なり、あるいは具体的な政策をコントロールす

る。非常に少数なんですが、総理大臣が委員長で、文部大臣、世話大臣として科学技術庁長官、それから大蔵大臣等が入っております。もちろん私のほかに関西電力の芦原さんとか、前は工業技術院におられた黒川さんなんかも委員です。

そんなのがあるんですが、平生はいつも5、6人しか委員は出ないで、めったに大臣が出てきたことがないんです。そこで、いま日本の科学技術行政というよりか、むしろ科学、あるいは工業政策というのが通産省にも関連するし、研究面になりますと文部省も関係するし、また科学技術庁が関係するというようなことで、予算は全部大蔵省が元締めで、同じ種類の研究は2カ所ではやっちゃいかんというような原則があって、なかなか進まないという話があったわけです。

1985年の時期における世界の石油の使用量というのは、1日2,600万バレルという形で抑える。で、それまで、またその時期における各国の使用量を考えて、それに対応したエネルギー政策を考えようということで、エネルギー全般の問題で、そういうようなことが出ております。

その中で、日本としては省エネルギーの問題と、それからもう一つは、日本は原子力の利用ということには力を入れているんですが、ほかには余力を入れていない。ドイツにしても、アメリカ、それからヨーロッパはみんな石炭を非常に考えている。日本ではなぜ石炭をやらないんだ、ということをしつこく言われる。問題は、日本は引き合わないから、やはりエネルギーのコストの問題でやらないのだ、というようなことで逃げているということです。

ちょうど、きょうの会議で、そういう問題が出たものですから、世界の — 世界といっても先進国17カ国ぐらいの会議で、大分日本は非難されているんだという報告があったので、ちょうど私も芦原さんも、それはとんでもない話なんで、イギリスの北海の油田がどうなるかわかりませんが、とにかくヨーロッパでは、石炭がかなり安心して使えるし、またその研究が進んでいる。アメリカは石油も石炭も十分やっている。日本がいま石炭のことを考えなかったら、いざとなったら日本だけどうにもならないんだ、と。

日本がなぜ豪州なり、あるいは中国の石炭のことを考えないのか。恐らく日本として、いまそれを運んできて使うということは — 最近、発電の方でも石油と石炭を混焼するようなこともやっているけれども、長い目で見た場合には、やはり石炭の輸送ということになると問題があるので、産地としては豪州、中国の石炭をどういふように加工するか、液化の問題もあるでしょうし、あるいはガス化、アルコール化の問題もあるでしょうけれども、とにかく技術者をそこへ送り出すことをば考えなければならぬんじゃないか、ということが一つ。

それから同時に、そちらにしたところで、中国でも豪州でも、石炭そのものを持ってくるにしても、港からつくらないといけないし、あるいは鉄道、交通機関も問題になる

ということであるから、当分の間は日本の製鉄所を中国へ持っていくとか、あるいはそういうようなことと関連して、とにかく技術者が相当そちらへ行って働かないといけない。いまちょうど大饗さんが言われた、国際化の問題の一つの大きなテーマになるわけです。学問的には、それは別としまして、科学技術者が必要だということが、何よりも問題なので、いま石油化学がだめになり、繊維がだめになるということで、化学の方では最近の受験生が、非常に質が落ちたというような問題が出ているわけです。

それから、当分の間、石炭を使うとなれば、それこそ公害の問題に科学者が大いに力を入れれば、石炭のコストの問題、あるいはそういうようなことも解決できるんじゃないか。

それと、その中にちょうど文部省からも来ておりましたので、そちらの発言もあったんですが、とにかく私学の理工系に対しての費用のかけ方が余りにも少な過ぎる。これはいまの私学の悩みです。この間からも私はずっと言っているんですけど、とにかくフィンランドでは国立と私立の大学が、ちょうど半々ぐらいですが経費は全部国が出している。ある場合には、ほとんど学費も全部なしで大学教育をやっている。それでもやはり私立大学は厳然として存在している。それが消えていきつつあるのがスウェーデンです。スウェーデンは、たった一つしか私立大学がなくなって、全部国立化しています。

私、一昨日かもNTVで竹村健一氏と対談をしたんですけども、とにかく、公、私の名をなくさなければ、私立はやはり安きに、あるいは下で甘んじているし、国立は国立で知らん顔しているから、まずこれをなくしてしまえというようなこと。同時に経費というものは、個人の負担するものが、そのままおこなうならば、3兆円ぐらい私学によこせ、と。いまたった2,000億足らずですが、そんなことを方々へ行って言ったりしているんです。きょうも、ちょうどいまの話が出たものですから、大いにケミストリー関係の技術者を、本当の意味で活用することを、本格的に考えなければいけないんじゃないか。

そういうような意味で、教室にはごぶさたをしておりますけれども、大いに化学者の養成のこと、また化学の発展のために、私学も財政的にきゅうきゅうしないで——さっきの大饗さんの話を聞くと大変耳の痛いところばかりで、これは私に対して一番響くんですけれども、このままではわれわれ教師もどうにもならないという段階に来ていますが、それでも、化学するための経費が、ある程度困らないというようなことから起こらないと、多少問題があっても、金をかけられるような早稲田の応用化学科にならなければいけないんじゃないか、ということを感じたわけでございます。

ちょっと感想を述べまして、いろいろお断りを申し述べました。（拍手）

教室近況報告

宇佐見昭次教授

応用化学科主任教授



私、30年卒業、新制5回の宇佐美でございます。ただいま教室の雑用を仰せつかっておりますので、簡単に教室の近況をご報告させていただきます。

幾つかございますが、一つは、先ほど来いろいろ環境の話が出ましたけれども、私どもの学科は、ちょうど11年前に西大久保のキャンパスに移転いたしました。応用化学の方は51号館の高い建物の8階、9階、10階にあります。化学工学は裏の方の60号館という低い建物でございます。都のいろんな規制がやかましくなしまして、キャンパスの中でいろいろ問題を起こしております。一方、学部全体としましても、手狭になったということもあります。それからもう一つは、うちの学科だけの特殊事情なんですけれども、移転の際に小倉記念館を、村井総長のおられます本キャンパスに残している。

そういったことを一諾にしようということで、学部の同意を得られまして、現在もう工事が進んでおりますが、明年の春に、理工学部のキャンパスの中の、明治通りに面したグラウンドがございますが、その一角に約5,580平米、1,700坪ぐらいですけれども、その中に応用化学科と化学科、もちろん化学工学も一諾に入ります。そういった形で、明春、竣工いたしますので、またその節には、卒業生の皆さんにもいろいろお出し願いたいと思います。

それからもう一つは、先ほど化学離れという話が出ましたけれども、皆さんにとっては入試のことがいろいろご関心事かと思っておりますので、ちょっとご報告いたしますと、理工学部は、この春は受験生が1万8,656名おりました。一応、国立の発表のあるまでいろんな手続を待ちますので、それを見越して合格者を発表いたします。採る数は1,690名なんですけれども、実際に発表いたしましたのは4,139名、ですから約22%の合格率で発表いたしました。

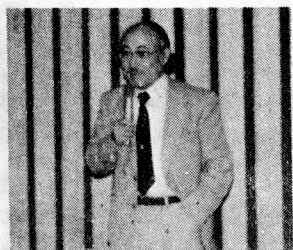
うちの学科は、1,255名希望者がおりまして、合格者が368名で、歩どまり33%、その率から見てもすぐおわかりのように、学部全体としては4.5人に1人なんです。うちの学科にとっては3人に1人ということで学部の中では、一番下はもう1学科ありますんですけれども、その次になってしまいました。

こういったことも、われわれの責任であるわけなんですけれども、一つには受験生で

すので、社会の情勢というもの的確にその中に反映してまいりますので、入った後の教育はわれわれの責任ですが、そういった点について、また、今後とも卒業生の皆様のいろいろご活躍をお願いしたいということでございます。

最後に、卒業生の皆様の基金によりまして、小林奨学基金というのが応用化学会にございまして、その中から果実といたしまして、毎年40万円ほど、教室の先生方の研究費にご寄付いただいております。教室の先生方にかわりまして、ここに厚く御礼申し上げます。

簡単でございますが、教室のご報告にかえさせていただきます。どうも失礼いたしました。（拍手）



大 饗 茂
筑波大学教授
日本化学会副会長



懇 親 会 会 場

2 職 場 紹 介

日本石油株式会社

日本石油精製株式会社

日本石油化学株式会社

同窓の皆様ますます御健勝のことと、お喜び申し上げます。紙面の一部をいただきまして、日本石油、日本石油精製および日本石油化学に勤務する応化会員の現況を御報告いたします。

日本石油は明治21年5月、新潟に“有限責任日本石油会社”として創立され、以来90年、常に石油業界をリードして来ました。現在では20余りの日石グループ各社が、原油の買付けから、輸送、精製、販売、さらには石油化学製品の製造、販売まで、石油にかかわるあらゆる分野で活躍しています。事業所も北は北海道から南は沖縄県にまでおよび、海外ではニューヨークに進出しています。

ところで、今石油業界では、石油戦略の柱として石油備蓄と日本周辺大陸だなの石油開発の問題が話題となっています。1973年のオイルショックを契機として、90日の石油備蓄が義務づけられたことはご存知の通りですが、日本石油は10年も前から、この備蓄計画を進めており、すでに鹿児島県喜入町に世界最大の貯油能力を誇る“喜入基地”を完成しており、いち早く90日備蓄を達成しています。一方の石油開発についても、中東級の大油田がねむっているとされる東シナ海の男女群島および四国土佐沖に鉦区を取得し、条約関連法が成立したらすぐに着手できる態勢にあります。このプロジェクトに成功すれば日本のエネルギー図は一変することになるでしょう。

さて、日本石油グループの中の製油部門を担当する日本石油精製は、昭和26年米国カルテックス社と折半出資によって設立され、日産5万2500 kl (33万バレル)の根岸製油所をはじめ横浜、下松、室蘭、沖縄と5つの製油所を有し、59万9210 $kl/日$ の処理能力をもち、それに日本石油の新潟製油所と日本海石油を加えると、その原油処理能力は1日約10万 kl にも達します。

石油化学分野への進出でも最古参です。昭和30年日本石油化学が設立され、業界のトップをきってイソプロピルアルコール、アセトンの生産を開始したのを初めとして、昭和34年には川崎地区石油化学コンビナートの中核会社としてエチレン、ブタジエンの製造、供給を開始しました。以来、その安定したナフサ供給を背景に着実な発展を続け、本年春にはエチレン製造能力は年産50万トンに達しました。一方では合繊原料、合成洗剤、溶剤、樹脂分野へと積極的に多角化に取り組んでいます。

以上日石グループの主な事業の概要を述べましたが、同窓生はその中の各職場の重要なポジションで皆元気に活躍しています。応化出身者によって「日石稲化会」という同窓会が作られており、メンバーは現在77名で、毎年秋に親睦を目的としてパーティーが開かれます。

次に「日石稲化会」のメンバーが活躍している職場を中心に近況をお知らせいたしますが、会員数が多く限られた紙面では十分に御紹介できないことを予めおことわり致します。

日本石油・日本石油精製関係

(1) 日精常務取締役 宮田隆吉（昭和12年）

日精下松製油所長、日精横浜製油所取締役所長を歴任後、現在本社で製造部および環境保安室担当常務として短期製油計画、省エネルギー、環境保安関係の社内的総元締めとして、またもう一方社外的には石連保安委員長として精力的にご活躍中です。

(2) 計算室（日石・日精合同室）

各部の専門家が集まり、社内の事務管理をコンピュータ化し合理化をはかる一方、日石・日精の販売支店、製油所、油槽間のオンライン化を進めており、将来の情報化時代に対処しております。その中のシステム課に松尾英一（昭和36年）、檜豊太郎（昭和50年）の両名があり、製油所の機械化計画の立案、オペレーションリサーチ等のソフト面での製油所合理化を進めています。

(3) 販売2部（日石）

販売1部は特約店を通じてユーザーと接触するのに対し、販売2部は電力会社等の直接大口需要家と接触する販売部門であり、殆んどが事務系の人で占められています。

その中で直売技術課に倉持誠（昭和46年）遠藤宣弘（昭和49年）の両名が販売技術面で技術サービスをはかる一方、商品技術の動向等の情報収集、調査、品質面の管理を行なっています。

(4) 潤滑油部（日石）

潤滑油、グリース、工業揮発油、ソルベント、パラフィン、硫黄、アスファルト等の特殊品を販売する部門で、潤滑油部副部長として岩淵興（昭和27年）、潤滑油課に金田昭彦（昭和36年 工経）の両名があり、短期および長期製油計画を立案するとともに、販売市場の調査、技術サービス、特約店に関する商品教育を行なっています。

(5) 商品技術部（日石）

販売関係は、事務系の人が多い中で、技術系の人が集まり、販売支店の商品技術課を通じてユーザーと接触し、商品クレームの原因調査、その対策等の技術サービス、および商品技術動向の調査、情報収集を計かる一方、中央技術研究所とタイアップし、長期的商品開発改良および日石商品の長期的製品規格を立案すると同時に、開発製品のユー

ザー開発も行なっています。

その中で技術グループに柳沢亘（昭和33年）（現在米国へ派遣中）、堤恭男（昭和35年）齋原隆（昭和47年）、山崎隆史（昭和50年）と多くの人達が活躍しています。

(6) 技術部（日石、日精合同部）

製油系、工務系技術者が集まり、製油所関係の総合計画（計画課）、プロセスの詳細設計（設計1課）、製油所油槽所等のオフサイト詳細設計（設計2課）があります。

その中の計画課に、大内正興（昭和40年）、渋谷敬一（昭和46年大修19）の両名がおり、販売部、社長室等の関連部のデータをもとに長期製油計画の作成と、その関連の製油所設備計画を含め製油施設の総合基本計画および製油技術調査研究等の業務にたずさわっています。

(7) 日石支店関係

① 千葉支店

支店長として片野沢敏郎（昭和27年）がおり、販売第1線の最高責任者として活躍中です。

② 大阪支店

商品技術課に渡辺修（昭和29年）がおり、活躍中です。（商品技術部参照）

(8) 中央技術研究所

将来の新製品開発の総合的技術研究を行なっています。その中では研究管理課に、早田喜穂（昭和48年大修21）が特許等の管理面に、また燃料油関係の研究で巾広い研究を行なっている第1研究室には、小倉茂稔（昭和37年）、渡辺治道（昭和38年）加賀屋峰夫（昭和47年大修20）、山崎由広（昭和50年大修23）がいます。また石油化学関係の技術研究を主に燃料油生成用触媒等の研究まで巾広い研究活動を行なっている第2研究室には、藤宗篤雄（昭和40年）、荒井栄三（昭和43年）、田島吉雄（昭和43年）が活躍中です。

(9) 製油所関係

① 日石、新潟製油所

日石随一の製油所で国産原油も処理し、高度に精製された絶縁油を生産しており、この品質管理課に林武司（昭和28年）がいます。

② 日精室蘭製油所

日精で最新鋭の製油所で、コンピューターを使って管理およびプロセスコントロール等を行ない、省エネルギーも進めています。

その中で製油関係の総まとめ役の製油次長として、鈴木久爾雄（昭和28年）が、計画課には、小俣達雄（昭和49年大修）が、また現場のオフサイトの責任者として吉村晃一（昭和34年）が操油課にいます。

③ 日精横浜製油所

日精で最も伝統ある製油所で現在潤滑油（特にタービン油）、ソルベント、ブロンアスファルト、特殊ガソリン等の特殊製品を製造しています。

製油所設備計画を担当する計画課に、吉田博幸（昭和49年 大修22）、山崎誠二郎（昭和51年 大修24）の若手兩名がいます。

④ 日精根岸製油所

燃料油、高級潤滑油を生産する総合製油所で、日石グループの約40%、日精の約60%の原油処理能力をもつ東洋で最大級の製油所である。その中で製油所の短期製油計画を担当する計画1課に清水固（昭和31年）、設備計画を総合的に担当する計画2課には橋本幸雄（昭和29年）、佐久間秀喜（昭和39年）が、また製造現場には、根岸本牧工場長として佐野和夫（昭和27年）、潤滑油課に高崎洋（昭和29年）が、また又木登司（昭和45年 大修18）、大沢伸行（昭和52年 大修25）、茶谷正明（昭和53年 大修）の若手が脱硫装置等で活躍しています。

⑤ 日精下松製油所

山口県下松市の風光明媚な土地にあり、新下松製油所の建設も地元住民からも強く要望されています。その中で品質管理課に片井邦夫（昭和31年）がいます。

⑥ 日精沖縄製油所

日本の最南端沖縄県にあり、カルテックスより日精が吸収合併した製油所で、現地の人が主に働いています。その最高責任者の製油所長として藤田耕平（昭和26年）がいます。

日本石油化学関係

(1) 社長室

予算管理、長期計画の立案、調査を担当する部門で、水野文夫（昭和37年）、萬肇（昭和39年）の兩名が海外計画や長期計画の立案に、今村文子（昭和53年）が事務のコンピュータ化にたずさわっています。

(2) 化成品本部

オレフィン、芳香族、ノルマルパラフィンなど化成品の販売を担当する部門で、日浦幸夫（昭和29年）がおります。我々のメンバーでは珍らしくずっと営業畑を歩いています。

(3) 技術部

プラントの設計、建設、改良などを総合的に担当する技術センターです。南和男（昭和38年）が高密度ポリエチレン分野の技術改良に取り組んでいます。

(4) 開発部

新技術や新製品を研究陣と一体になって開発する部門です。ここでは川上 徹（昭和

31年)、大美賀広芳(昭和49年 大修22)が新製品のパイロットテストと商品開発に取り組んでいます。又、安倍通夫(昭和15年)がアドバイザーとして後進の指導に当たっています。

(5) 川崎工場

20数年の石油化学の歴史が、この工場に豊富なノウハウを蓄積させ、数多くの技術的成果をもたらせました。川田 宏(昭和35年)、川上重信(昭和46年 大修19)、山口辰夫(昭和52年 大修25)が品質管理と技術開発業務に、牧野康伸(昭和36年)が設備計画業務にたずさわっています。

(6) 浮島工場

川崎地区コンビナートの中核をしめる当工場は当社の生産の中心地で、我々のメンバーもここに一番多く11名がいます。今津和郎(昭和30年)、木下義彦(昭和39年)は化成品の製造業務に、久保博義(昭和31年)、渡辺社太郎(昭和45年 大修18)、藤沢一喜(昭和50年)は生産管理や設備計画の総合的立案に、持丸次雄(昭和44年 大修17)は製造管理のコンピュータ化に、牧野貞夫(昭和32年)、小林征三(昭和38年)、岡田一利(昭和43年 大修16)は品質管理に、糸州 襄(昭和41年)、坂爪寿恵広(昭和51年 大修24)は低密度ポリエチレンの製造業務や技術改良に皆夫々張り切っています。

(7) 樹脂研究所

ポリエチレンを中心とする各種樹脂の基礎物性や加工技術を研究する部門です。平山利治(昭和33年)、矢崎文彦(昭和35年)、野際基実(昭和43年 大修16)が新製品の市場開拓を中心に活躍しています。

(8) 日石樹脂化学

高密度ポリエチレンとポリブテンの製造を担当する子会社で、山田早太(昭和27年)が副工場長として、比留間哲生(昭和40年)が製造課に派遣されています。

関連会社その他

(1) 日本石油加工(株)

日石の特殊潤滑油、グリース等を主に生産している日石100%出資の子会社。松岡康行(昭和21年)が常務取締役製造部長をしております。

(2) 日石商事(株)

田中 宏(昭和21年)が直売部長をしております。

(3) 日石伊藤忠(株)

伊藤英次郎(昭和16年)が取締役技術部長をしております。

(4) 日新商事(株)

柴田喜一郎(昭和18年)が技術顧問をしております。

(5) その他

平野静夫(昭和8年)は中央技術社社長として、福島健重(昭和18年)は(株)高田工場で、福田喜男(昭和20年)は高圧ガス保安協会で御活躍されています。

以上で日石グループに勤務する同窓会員の近況報告を終らせていただきます。なお、敬称および役職名は省略させていただきました。不十分な点多々あろうかと存じますがなにとぞ御容赦下さい。

最後に今後の会の発展を祈りまして失礼致します。

(萬、大内 記)

3 母 校 だ よ り

3-1 新 任 教 員 挨 拶

西 出 宏 之

私は昭和45年卒業。その後土田英俊教授のもとで博士課程を終了。この度応用化学科助手に嘱任されました。

昨年、西独フムボルト財団奨学研究員として1年間ベルリン自由大学に留学する機会を得ました。私が在籍したManecke研究室は固定化酵素、高分子試薬など機能性高分子を提唱する西独における中心です。西独における化学系学科の傾向として、合成技術、分析手法の習熟に入念であり、かつ社会に役立つ化学という強い意識をもっております。滞在中、ルフトハンザ機乗っ取り事件をはじめ相つぐテロ事件はしばしば同様な問題をかかえる日独比較論に及びました。

現在、高分子化学土田研究室において高分子金属錯体に関する研究を分担しております。これは酸素ガスを運搬する高分子、触媒機能をもつ樹脂として夢の多い分野です。オリジナリティのある仕事をがむしゃらにやっていくことが第一と考えております。なんと云いましても若輩ゆえどうかよろしく御指導の程お願いします。

逢 坂 哲 彌

昭和50年4月に化学科の助手となり、昭和51年7月から昭和53年6月迄米国ワシントンD.C. ジョージタウン大学のdeLevie教授のところでリサーチ・アソシエイトとして勉強してまいりました。deLevie教授は電気化学、分析化学および生物物理の各方面で活躍されておりますが、私は電気化学分野の電解質イオンの電極への吸着について担当いたしました。電極/電解質系のイオン吸着は各種電極反応を検討す

る上で最も重要な因子の一つとなるため古くから熱力学的測定手段で検討されています。この因子をある適当な反応を利用して反応速度論的方法ですみやかに測定しようというのが研究目的でありました。すでに過臭素酸還元反応がこの方法に適することが de-Levie 教授によりみいだされておりましたので、この反応を利用し特に高濃度域(実際の応用性が高い領域)の測定を行ないました(主として F^- および ClO_4^- イオン)。その他この研究室では人工細胞膜(Black Lipid Membrane)のイオン伝導の研究を行っており、測定機器の制御およびデータ解析にはミニコンを導入しております。ジョージタウン大学の大学院コースはこちらとくらべましてかなりきついようで最初に Phase 1 とよばれる必修の 4 コースの試験を通りませんと修士論文に進むことができず Ph.D. コースでは Phase 2 とよばれる論文報告試験(数人の教授が最近の論文誌からいくつか問題を取りだし、学生は 1 週間以内にその解答をださねばなりません)を通りませんと博士論文に進めないようです。このように大学院コースでかなり強制的に勉強をしいるのには驚きましたが、そのかわり学生の方はいやでも実力がつくようです。なかには優秀な学生がいて、学部卒業と同時に学士と修士をとってしまうような学生がいました。

以上簡単にジョージタウン大学での経験を書いてみましたが、今後共皆様の御指導をよろしくお願い申し上げます。

3-2 学 生 部 会

応化会 ボーリング大会 レポート

修士 2 年 田 中 隆 一 郎

応化会ボーリング大会が、さる 5 月 12 日高田馬場 Big Box において開催されました。参加者応用化学科大学院生、学部生総勢 200 名の見守る中、10 時半、土田教授の見事なストライクの始球式で、競技は開始されました。いつも持ち馴れた試験管やフラスコの感触をこの日ばかりは忘れ去り、普段持ち馴れない(?)ボールを操ろうとするばかりに珍プレーの続出となり、会場に笑いの渦が絶えませんでした。また普段では見られない学部生と院生の交歓風景も見られ、時のたつのもわずれるうちに、2 時間に互る団体戦による熱戦の末、土田研究室チームの優勝、加藤研究室チーム、宇佐美研究室チーム、一年生チームの準優勝という結果に終わり、優勝チームにはトロフィーと罐ビール、また準優勝チームには罐ビールが授与され、和やかなうちに 12 時半散会となりました。

(応化会学生部会委員)

学生部会この一年

修士2年 永井博彦

昨春、突如として応化会学生部会委員に指名され、挙句の果てにまとめ役にまつりあげられてから一年余が過ぎた。この間学生部会が主催、後援した行事として、ソフトボール大会(5月)、応化早慶戦(10月)、理工展への参加(11月)、研究室紹介(2、3年生対象)(12月)、ポーリング大会(本年5月)などがある。

そもそも学生部会の活動は、学生会員への応化会々費の還元、学生相互の親睦を趣旨としたもので、ここ兩三年に活発化したものであるという。現在その活動、行事も学生間に定着しつつあり、今後一層の発展、活発化が望まれる。そこでこの一年間の学生部会の活動をふりかえり、その問題点、更には将来への指針について述べてみたい。

1. 学生部会組織と学生の認識

現在の学生部会は、研究部門別にはほぼ2研究室から1名の割で選出されたM1の委員および各学年から2、3名ずつ選出された学部生の委員によって構成されており、委員総数は約15名である。しかしながらその組織内容は不明確なものであり、柔軟というより軟弱である。このため学生部会の存在自体が不明確であり、一般学生から遊離している現状は否定できない。

こうした学生部会の弱体化、学生からの遊離という事について次の様な原因が考えられる。まず、学生部会々合への委員の出席率が低い事があげられる。出席率が低いことに対する一次的原因として考えられる事は、委員の無気力(これは機械的指名という選出方法にも問題がある)、ならびに時間的制約(1~4年、および各研究室のM1が一同に会せる時間帯を探すのは容易ではない)である。

次に出席率の低さは、一部委員をして行事運営に当たらしめる結果となる。これは行事運営の実務的側面に関しては数人で足りるためである。これが二次的原因となって出席率の低さにフィードバックされる。

このような悪循環によって、委員がまず学生部会から離れてしまい、一般学生とのコミュニケーションが断たれてしまう。このため学生部会が独善的、マンネリの行事の執行機関になってしまいう危険があるし、学生側としてみれば、その様な行事の主体としての学生部会の存在を見失なう結果となる。

以上、学生部会の現状について述べてきたが、将来学生部会を強化し学生と密着したものにするために次の様な事が考えられる。すなわち委員の選出方法を改善し、世話好きな宴会幹事の人間を委員に指名する事。これにより前述の悪循環が断ち切れ、行事内容に学生の意向が反映されるであろうし、伝達についても徹底がはかられる。そうすれば必然的に学生に密着した学生部会になるであろう。

2. 行事の性格と問題点

学生部会が企画、実行する行事は、会費還元、学生相互の親睦という活動趣旨にそったものでなければならない。そこで行事の企画は具体的には次の2点に留意しなければならない。すなわち

(1) 無料で参加できる行事

(2) 全員が参加できる行事

全員が参加できるというのには次の3つの条件がある。

(1) 各学年、各研究室の授業、研究に支障のない期日、時間。

(2) 住居分布等で参加者が偏るおそれのない場所(現実的には学校周辺)

(3) 学生の嗜好に合った内容。

以上、行事の企画に際し考慮すべき点を挙げたが、これらの点を満足する行事の企画は現実にはかなり困難であり、いきおい型式化、マンネリ化の方向へ向うおそれがある。

次に、行事を実施するに際しての問題点を、昨年実施した行事に沿って述べてゆきたい。

(1) ソフトボール大会

ソフトボールは研究室配属学生に特に人気のある種目である。そのため常に約30チーム、約300人(学生の半数)の参加が見込まれる。またソフトボールの持つ性格も学生部会活動の趣旨に照らして妥当なものといえるし、団体競技である事から事務的管理も容易である。しかし、ソフトボール大会実施には球場の確保という大きな問題がある。周知の如く、昨今は草野球ブームで球場の需要は多く、そのためどこの球場も抽選制で申込を受付けている。一方、30チーム参加のソフトボール大会で、トーナメント形式にでもしようとするれば、最低4面、できれば5~7面、終日借切らなければならない。2時間単位の申込では、1面の終日確保さえ至難である。また広い球場をかけ回っての連絡、連行管理などにはかなりの組織力を要する点、日頃の組織の体質が問われる事になる。また一部ではあるが、試合をめぐる感情的対立が生ずる事もあるが、これも運営面である程度防止できるものである。

最後に最大の問題として女子学生が参加しにくい点がある。

(2) 応化早慶戦

これは、52年度学生部会目標、「他大学応用化学科と親睦」の一環として実行したものである。前回は運営を慶応側にお委せしたのであるが、本年は当方で実施する事になる。この場合、対外的な事でもあり、あまりルーズな運営はできないが学生部会の現状を考えると不安が多い。

(3) 理工展参加

理工展参加については、学生部会は有志の後援の形をとっている。したがってテーマの決定などにも関与していないが、各研究室における研究内容に一種のショウの要素をもつものが少なく、新しいテーマを見つけられない悩みがある様である。

(4) 研究室紹介

例年、工化、化工コース別け、研究室配属を控えた2、3年生の参考に供するため、パンフレットの作成と院生による説明会を開催している。元来、研究室の研究内容を門外漢(程度の差はあれ)に説明しようというのは至難の技である。その上時間の制約から1研究室への配当時間が約5分であるから、これは聞く側に立てば不得要領、不満足な気持ちにならざるを得ないと思う。また質問時間もなく、実施方法には改善の余地が多い。

3. 将来の課題

これまで、あまりパツとしない現状についていろいろ述べてきた。それでも最初に述べた様にいくつかの行事は学生の間に着定しつつある。こうした恒例行事を存続させてゆくのはもちろんの事であるが、更に積極的に取り組んでほしい2、3の問題がある。

第一に挙げなければならない事は、1、2、3年生と研究室配属学生(4年、M1、M2)との格差である。両者の違いは学校での生活形態に由来するものであり、研究室配属学生の方がチームワーク、日頃の運動量などで1~3年生に格段の差をつけている。このためスポーツ大会への参加者は研究室配属学生が大半で、優勝も研究室チームが多い。

この現象を別の角度からながめると、1~3年は各学年百数十名という大所帯ゆえにまとまりがなく、こうした行事に無関心であり、研究室配属学生は参加率は良いものの、その関心は各研究室集団内に向いている。これでは学生相互の親睦といった目的は達成されない事になる。

対策としては、学年別行事の企画、完全な個人単位の参加申込制などが考えられるが、かなりの実行力をもった組織が必要である。

第二には女子学生に対する考慮である。応用化学科は理工学部の中では女子学生の多い学科であり、全学生の5~10%を占めるであろうか。多人数ではないにしても、やはり女子も参加できる行事を企画すべきであろう。まさか、当節はやりの女子野球チームを結成するわけにはいかぬであろうから、毎度毎度ソフトボールでは気の毒である。

最後に、他大学の応用化学科との交流である。昨年は応化早慶戦として慶大応用化学科との親睦をはかったが、この様な専門を同じくする他大学学生との接触は無意味な事ではないと思うので、学生部会が中心となって交渉をすすめてほしいと思う。

(応化会学生部会委員)

3 - 3 化 学 系 新 棟

化学系新棟の建設は昭和49年に提出された理工学部将来計画小委員会の答申にもとづくものであるが、昨年春以来、この問題処理のためのワーキンググループが組織されて建設場所、規模等について検討を重ねられてきた。このグループには化学系を代表して加藤忠蔵教授が参加し努力された。また本部キャンパスの小倉記念館（運営委員長森田義郎教授）の移設に関しては村井資長総長をはじめ理事側の多大な配慮があった。理工学部学部長室、教授会の理解とともに、教室の先生方のご支援ならびに前記諸先生のご尽力があったことを記しておく。

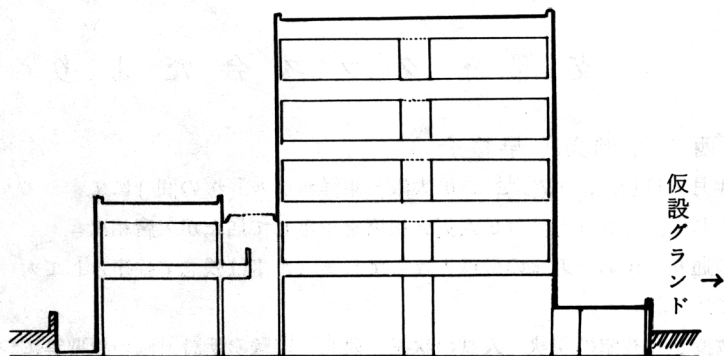
理工学部化学系新棟の概要

場 所	仮設グラウンド北側（56号館 東側）				
構 造	鉄筋コンクリート造				
規 模	地上5階建一部2階建				
軒 高	標準地盤より20.180 m				
面 積	1 階	1629.20 m ²	2 階	1305.52 m ²	
	3 階	838.32 m ²	4 階	838.32 m ²	
	5 階	838.32 m ²	塔 屋	130.00 m ²	
				合 計	5579.68 m ²

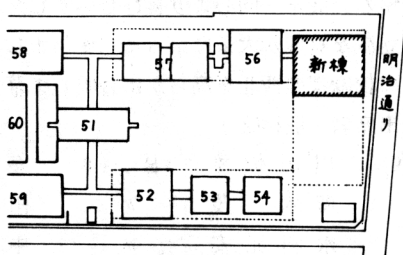
研究室・実験室等の配置

- 1階 ○応用化学科化学工学系研究室（豊倉、酒井）および実験室、化学工学コース学生実験室および準備室
○理工学部学生サークル部室
- 2階 ○応用化学科工業化学系研究室（宮崎、菊地）化学工学系研究室（城塚、平田）および会議室
○小倉記念館記念室および実験室（石油化学、オリゴマー、粘土化学、触媒機能、錯体化学、触媒化学他）
○他学科化学系研究室
- 3階 ○応用化学科工業化学系研究室（村井、森田、篠原、鈴木、宇佐美、土田）および実験室
- 4階 ○応用化学科工業化学系研究室（大坪、吉田、加藤、長谷川、佐藤）および実験室
○応用化学科および化学科連絡事務室（主任室）
- 5階 ○化学科研究室、実験室、会議室

断面図



理工学部キャンパス校舎配置図



3-4 教室人事・消息

本年4月1日付で酒井清孝助教は教授に昇格、西出宏之氏は助手に新任された。また逢坂哲弥助手(昨年4月1日付で化学科より応用化学科に転籍)は米国ジョージタウン大学に留学中であったが、本年6月無事帰国された。

なお理工学部共通実験室第5課(化学系学生実験室)課長であった猿井喜一郎氏は6月1日付で本部総長室調査役(環境保全問題担当)となり、第5課長には幸田弘氏が嘱任された。

応用化学科主任教授は6月29日の教室会議において宇佐美昭次教授の留任に決定した。7月6日の教授会において次期理工学研究所所長に加藤忠蔵教授が選任された。

菊地英一教授が「第Ⅷ族遷移金属触媒による炭化水素のガス化とその関連反応の基礎研究」で昭和52年度石油学会賞論文賞を授与された。

4. 支 部 ・ ク ラ ス 会 だ よ り

○ 関西支部例会（早桜会）

去る4月7日(金)、17.³⁰より大阪、東洋ホテル「桜の間」にて本部より加藤教授をお迎えして開催された。40人近い出席を予定して居たが欠席相次ぎ、当日の出席者は下記の通り29名と近來の最低となってしまった事は残念で幹事として大いに反省させられて居る。

加藤教授から教室の現状、入試の状況、研究、実験室新設計画の概要等につき御説明あり、教室の発展を一同心より喜び合いました。出席者の数が少く、特に若い人の出席が僅かで立派な料理が大量に余ってしまいましたのは残念でした。

散会前に校歌都の西北を高らかに合唱して幕を閉じた。（高橋記）

早桜会出席者（敬称略）

S. 9	川田恒雄	S. 18	多田長定	S. 31	大森一成
"	藤木茂	"	田中良	S. 34	近藤昌浩
"	水科元安	"	中村敏夫	S. 41	森啓
"	由良泰夫	S. 20	高橋章	S. 42	田中航次
S. 10	前島申孝	"	加藤忠蔵	"	中島正臣
S. 11	鎮目達雄	S. 21	吉田綏	S. 47	八尾純二
"	竹原兼吉	"	馬場研一	S. 49	高久浩一郎
S. 13	植田忠衛	S. 22	金谷謙介	S. 51	大橋悦郎
"	山田元四郎	S. 23	管井康郎		
S. 14	久保田穂亮	S. 27	佐藤剛		
		S. 29	覚野久雄		
					以上 29名

新制12回クラス会

2月25日恒例のクラス会を新宿の東京大飯店で午後5時からおこなった。初参加の森川、後藤、大島、永藤、永井、等の顔も見え、各々近況報告、歓談のうちに時のたつのも忘れ、午後8時散会した。

参加者（敬称略）

小川、佐藤、永藤、中島、佐々木、永井、池内、金子、田原、増山、平川、森川、後藤、長谷川、小倉（茂）、大島、高桑、竹田、西、岸本（岸本記）

新制13回卒業生クラス会

卒業後15年、5年振りのクラス会を5月20日(土)大隅会館内の完之荘で行った。工場勤務から本社に戻っているものも増え、全く15年振りに再会するものも多く、出席者の24名の盛会であった。

仕事の苦勞話、家庭の話、学生時代の思い出話等々、予定時間のオーバーするものも忘れて談笑した。(前川記)

出席者は次の通り

安藤・岡本・川田・国分・坂下・重村・白田(旧姓工藤)・高橋(紘)・高橋(浩)・鶴丸・豊田・橋本・福田・堀(旧姓池田)・堀井・堀内・松崎・山川・山口・吉池・吉田(善)・吉田(喜)・渡辺・前川。

5 昭和52年度庶務・編集報告

1. 役員会総会

日時：昭和52年4月1日(金) 18:00~20:30

場所：大阪東洋ホテル 出席者 115名

講演 演題 「私の経営観」

講師 佐治敬三氏 サントリー(株)社長

(4月30日(日) 古都見学会 出席者 32名)

2. 運営委員会

日時：昭和52年9月30日(金) 17:30~20:00

昭和53年3月17日(金) 17:30~20:00

3. 応用化学科創設60周年記念式典

日時：昭和52年11月11日(金)

場所：日本工業倶楽部

(1) 功勞者表彰

東京工芸大学教授 宮本五郎氏

東京工業大学名誉教授 神原周氏

(2) 記念講演

演題 「私の不況脱却論」

講師 木内信胤氏

(世界経済調査会 理事長)

出席者 157名

4. 特別講義

- (1) 日時 : 昭和52年9月28日(水) 16:00~17:30
演題 「フィールドエンジニアリング序論」
講師 小林 宏氏 (東京瓦斯(株) 副本部長)
出席者 200名
- (2) 日時 : 昭和52年10月26日(水) 16:00~17:30
演題 「界面活性剤と合成洗剤」
講師 阿部 芳郎氏 (慶応義塾大教授)
出席者 200名
- (3) 日時 : 昭和52年11月30日(水) 16:00~17:30
演題 「研究・技術開発の実際」
講師 速水 清之進氏 (千代田化工建設)
出席者 200名

5. 学生部会活動

- (1) ソフトボール大会
日時 : 昭和52年5月20日(金) 10:00~18:00
場所 : 葛飾区荒川第3運動場
参加者 280名
- (2) 応用化学科 ソフトボール“早慶戦”
日時 : 昭和52年10月29日(土) 15:00~19:00
場所 : 慶応大学工学部グラウンド (日吉)
参加者 50名
- (3) 応化展 (理工展)
日時 : 昭和52年11月4日(金) ~ 11月6日(日)
内容 : 人工臓器、人工血液、人工血管、核酸関連物質
の食品への応用 参加者 20名
- (4) 研究室紹介
日時 : 昭和52年12月7日(水) 16:00~17:30
参加者 300名

6. 応化会だより発行

昭和52年7月 (第22号)
昭和53年2月 (第23号)

昭和 52 年度 会 計 報 告
収 支 決 算 表
(自昭和52年3月16日至昭和53年3月15)

収 入			支 出		
費 目	金 額	予 算	費 目	金 額	予 算
前期繰越金	2,001,541	2,001,541	会 報 費	1,506,210	1,100,000
正 会 員 会 費	1,883,000	1,800,000	名 簿 費	2,732,550	2,400,000
有志 会 員 会 費	9,000		特別集 会 費	1,215,277	1,000,000
学 生 会 員 会 費	448,750	400,000	集 会 費	50,740	100,000
廣 告 料 金	1,150,000	1,150,000	学 生 部 会 費	177,070	200,000
諸 利 息	122,008	100,000	集 金 費	43,790	50,000
寄 付 金	217,500	0	支 部 費	50,000	50,000
雑 収 入	132,700	50,000	用 品 費	18,830	30,000
名簿積立金取崩	400,000	0	事 務 費	427,000	370,000
			雑 費	12,601	20,000
			次期繰越金	130,431	(予)181,541
	6,364,499	5,501,541		6,364,499	5,501,541

寄 付 金

旧16有志14名 70,000円	水科 光安(旧14) 8,500
昭和電工(株)	出倉 幸一(有志) 5,000
応化出身者一同 69,000	会報費
早大・理工・化学科 30,000	だより№22(18頁, 4,000部) ¥575,160
小林 宏(新2) 20,000	// №23(36頁, 4,000部) ¥931,050
速水清之進(新9) 15,000	特別集 会 費 別記の通り

名 簿 刊 行 費

	50年度	51年度	52年度	計
A 編 集 費	114,005	190,045	77,920	381,970
B 造 本 費 (2500 部)		60,640	2,400,000	2,460,640
C 訂 正 ・ 変 更 案 内 (4000 部)			91,560	91,560
D 発 送 費			163,070	163,070
計	114,005	250,685	2,732,550	3,097,240

名簿単価 = $\frac{A + B}{2,500} = 1,137 + 160$ (送料) = 1,300

貸借対照表 (昭和53年3月15日)

借方		貸方	
費目	金額	費目	金額
現金	81,692	全納会費預り金	1,015,700
郵便振替	247,317	名簿刊行積立金	1,750,000
郵便貯金	125,234	基金	1,890,000
普通預金	111,888	次期繰越金	130,431
定期預金	4,220,000		
	4,786,131		4,786,131

小林奨学基金利息収支決算表 (自昭和52年3月16日)
(至昭和53年3月15日)

収入		支出	
費目	金額	費目	金額
前期繰越金	430,160	教員研究費	400,000
貸付信託収益金	381,494	次期繰越金	417,091
普通預金利息	5,437		
	817,091		817,091

基金(貸付信託)総額477万円(小林基金354万円,水野氏123万円)
使用済利息407.5万円

昭和53年度予算表

収入		支出	
費目	金額	費目	金額
前期繰越金	130,431	会報費	1,500,000
正有志会員会費	2,470,000	集金費	250,000
学生会員会費	450,000	学生会費	200,000
利息	100,000	集金費	100,000
		支部費	100,000
		用品費	50,000
		事務費	800,000
		雑費	50,000
		予備費	100,431
	3,150,431		3,150,431

特 別 集 会 収 支 表

(1) 関西集会 (役員会、総会、見学会) 収支

収 入		支 出	
総会参加費 ($\text{¥}4,000 \times 88$) ($\text{¥}2,000 \times 17$)	386,000	通信費	87,470
見学会参加費 ($\text{¥}2,000 \times 32$)	64,000	総会・懇親会費	829,730
本会補助金	621,500	見学会費	154,300
	<u>1,071,500</u>		<u>1,071,500</u>

(2) 応用化学科創設 60 周年記念会収支

収 入		支 出	
参加費 ($\text{¥}5,000 \times 123$) ($\text{¥}3,000 \times 16$)	663,000	通信・交通費	61,850
本会補助金	593,777	記念品(時計2ヶ)等	67,220
	<u>1,256,777</u>	講演謝礼	60,000
		懇親会費	1,039,957
		人件費	15,000
		雑費	12,750
			<u>1,256,777</u>

6 昭和53.54年度役員、事務局および評議員

役 員

会 長	大友恒夫(旧19)		
副 会 長	篠原 功(旧18)	古関敬三(旧26)	高橋 章(工 9)
監 事	伊藤 孝(旧17)		
会 計 委 員	鈴木春男(旧27)		
庶 務 委 員	土田英俊(大 8)	百目鬼清(新 1)	
編 集 委 員	酒井清孝(新15)	名手孝之(新 9)	岸本孝夫(新13)

事 務 局

堀 富士子

評 議 員

山	沢	松	男	細	田	喜六郎	赤	林	宏	佐々木	健	二
稻	田	勇太郎	太	板	倉	宗男	今	井	昇	長谷川	和	正
色	川	御胤	胤	柴	田	和雄	光	井	武	川	田	力
桑	原	光次	次	種	村	哉	山	田	寅之助	橋	本	一郎
高	木	外誠	誠	岩	城	謙太郎	佐	藤	光正	追	川	滋
坂	田	惣治	治	大	饗	茂	吉	富	末彦	萬		肇
芳	賀	惣文	文	小	森	藤	土	本	皓二	大	竹	之
鳥	居	敬壽	壽	綿	引	章	藤	原	卓利	坪	井	忠
七	井	永雄	雄	犬	塚	己	小	林	礼次郎	長	田	仁
竹	内	光周	周	高	野	良	久	保	良	官	島	男
神	原	信三	三	関	水	常	熊	沢	章	大	林	二
細	井	一彦	彦	清	嶋	幹	小	林	宏	加	藤	紀
若	山	信夫	夫	高	橋	信	田	中	尚	竹	下	生
田	上	静亮	亮	石	館	達	本	田	隆	小	寺	雄
平	野	鹿平	平	田	中	根	木	本	俊	古	賀	紀
横	山	幸二郎	二	中	曾	莊	堀	内	志明	入	江	一
堀	米	良雅	雅	西	福	公	山	本	明	杉	野	透
桑	原	敏雄	雄	福	阿	保	山	沢	貞	鴈	谷	生
田	中	寛吉	吉	阿	大	原	佐	藤	一	洩	森	誠
中	岡	隆太郎	郎	小	野	定	岩	岡	正	魚	見	彦
百	武	佐太郎	郎	大	別	裕	津	富	精	里	部	一
官	田	勇介	介	小	服	裕	原	田	誠一郎	阿	崎	次
春	日	鴻	介	別	山	造	松	田	道	小	野	樹
川	久	通	夫	服	崎	己	猪	股	道	糸	氏	一
古	城	純義	義	山	横	次	小	松	道	山	瀨	雄
野	村	林太郎	郎	横	小	二	岡	原	清之進	小	森	夫
安	倍	馨	郎	小	池	男	岡	田	有	里	見	英
京	都	馨	郎	池	望	文	速	水	博	中	林	彦
村	松	郁太郎	郎	望	浦	良	山	本	昭	風	間	郎
岩	崎	郁太郎	郎	浦	相	希	松	本		湯	本	貢
川	端	伝		相	沢	祥	山	口		(8月7日現在)		
小	田			沢	田	充	村	上				

7 会費値上げについてのお願い

会員各位殿

早稲田応用化学会

会長 大友恒夫

本会々員の皆様には常々本会のためにご協力を賜り有難く感謝致しております。

さて、本会の正会員会費（年額）の過去の推移はつぎのようになっております。

昭和23年度	100円	昭和24年度	300円
" 32 "	500"	" 45 "	1,000"
" 50 "	1,500"		

このような比較的安い経費で本会がこれまで運営されてまいりましたのは、一部会員の特別なご寄付やご尽力と応用化学科教職員・学生の労力奉仕があり、かつ、安い賃金で使用できる有能なアルバイト婦人がたまたまえられたからであります。しかし近年会員数の増加が著しく（現在会員数4,181名、年に約140名増）、それに伴い事務量も当然著しく増加致しておりますが、教職員・学生の労力奉仕には自ら限度があり、その上、安い賃金のアルバイト者もえられなくなってまいりました。本会が従来程度の活動を続けてまいりますのにも、まず事務機構の増強が急務でありまして、それには人件費をかなり大巾に増額する必要があります。さらに、「応化会だより」の発行（従来年2回）を1回でも増加するなど会の活動を盛んにしようと致しますと経費の増加はさらに大きくなり、諸物価の値上りも加わって、現行の会費年額1500円ではとてもまかないきれないのであります。このような次第で、必要経費増加分の一部を全会員各位にご負担願うため、役員会および総会（53.5.11）のご承認をえまして、本会々費を下記の通り改訂させていただくことになりました。誠に心苦しくはありますが何卒従来以上のご協力を賜りますようお願い申し上げます。なお、この改訂によりましても経費はまだ不足する状態でありまして、不足分は別紙のように有志の方々のご寄付を仰がざるをえない実情になっておりますことも併せて申述させていただきます。以上

記

昭和53年度より

正会員および有志会員会費年額2,500円（学生会員会費は年額1250円とし、昭和54年度新入生より入学時に学部は4年分5,000円、大学院は2年分2,500円を徴収するものとする）

< 編集後記 >

編集委員が交替しました。岸本孝夫氏には残って頂き、新たに名手孝之氏、酒井清孝が加わりました。

今回からは多少趣向を変え、同窓会機関誌としての性格を明確にすべく、記事のグルーピングを行いました。このような形で今後進めていく予定ですので、積極的に記事の御寄稿をお願い致します。

特に職場紹介の記事を充実していきたいと思っております。今回は日本石油グループの萬 肇氏、大内正興氏にお願いして、職場紹介の雛形を作って頂きました。卒業生の多い職場から順次載せていくつもりです。次回は、先の総会出欠ハガキに記載して頂いた会員の近況報告を主にした編集を企画しております。御期待下さい。

(酒井 清孝 記)

昭和53年9月 発行

発行 早稲田応用化学会
新宿区大久保3-4-1 早大理工学部内

編集兼
発行人 酒井清孝 名手孝三 岸本孝夫

印刷 饅堀越研究所
千代田区神田神保町2-20